

授業改善プラン

地域名	葛南教育事務所	学校名	市川市立二俣小学校
-----	---------	-----	-----------

1. 課題（これまでの全国学力・学習状況調査結果等から）

令和4年度全国学力・学習状況調査において、本校児童の算数の結果は、全体としては全国平均や県平均をやや下回る結果となった。算数の領域別に見ると「D データの活用」が平均より大きく下回っていた。また、本校の児童は「データの活用」に限らず、課題に対して絵や図、数式を用いて自分なりの解決方法を表現することを苦手としている。そこで、互いに学び合いながら、互いの考えや表現の良さを振り返ることにより、自分の思考を深め、より良いものを追究しようという表現欲求が高まるであろうと考え、研究の主題と副題を設定した。

2. 取組のポイント（仮説、改善方法等）

- 研究主題「自分の考えを豊かに表現できる子の育成」～学び合いの活動を通して～
 - 重点領域を設定し、授業改善を図る。
- 「ちばっ子の学び変革」推進事業の加配教員とともに、学習の習熟度や児童のつまずきについて情報を共有することで、適用・適応問題として扱う教材について検討し、学習の定着を図り、授業の改善に努める。

3. 具体的な実践

- ①課題提示・自力解決・比較検討・まとめ・応用問題での習熟の基本的な授業スタイルを全校で統一する。
- 提示された課題から、「見通しを立てる」→「学習問題を考える」→「自力解決をする」→「比較検討をする」→「学習のまとめ・振り返りをする」という流れを、教師側も児童側も習慣付けることができた。
- また、児童が自分で学習問題を考える習慣を身に付けるよう、授業展開を工夫することができた。
- ②単元ごとに一人一人の学習状況を適切に把握し、少人数指導など指導形態を工夫する。
- 各単元の指導にあたりプレテストを実施し、5年生は2クラス、4・6年生は3クラスに習熟度別に分けて指導している。教員間で共通理解を図り、①指導の重点、②既習の掲示物作成、③習熟度に応じたワークシートやヒントカードの作成を行い、比較検討の場における話し合い活動の充実を図ることができた。
- ③発表の仕方・話し合うときの決まり・ノート書き方などの学習規律を身につけさせる。
- 話し合い活動においては、①自分と友達との考え方の相違点、②友達と友達との考え方の相違点に気を付けながら聞くことを意識させた。発表の仕方のルールでは、①「まず・次に・だから」などの言葉に気を付けながら発表すること、②算数の言葉を使いながら説明することへの意識付けが図られた。ノートの書き方では、学習問題を青で、まとめは赤で囲むことを学校全体で共通理解している。

④既習事項を掲示するなど、教室環境を整える。

既習事項を振り返りながら本時との違いについて確認したり、自力解決の糸口を見付けられるようにしたり、既習事項の掲示を効果的に活用した。また、既習事項の掲示物は、それぞれの時間のまとめに留まらず、児童たちの学びの軌跡やつながりがわかるような工夫をすることができた。

⑤具体物や半具体物等を用意したり、自分の考えを書いたりするなどの数学的活動の時間を十分に確保する。

学習問題を提示する場面では、イメージしづらい数量について実物を見せ、長さや量の検討をつけられるように工夫した。また、数図ブロック等を用いた具体物操作とヒントカードの活用により、学習への理解を深めた。説明文を書くことが苦手な児童には、穴埋め形式で説明文を書くことができるようなヒントカードを用意する等、実態に応じたワークシートを活用することで、自分の考えを書いたり、グループで伝え合ったりする活動に意欲的に取り組むことができた。

⑥課題提示や比較検討の場でICT機器を効果的に使い、視覚的支援をする。

問題の提示を、デジタル教科書と大型提示装置を活用しながら行った。児童が用いている教科書と同じもの（同じ文字列や配置、図形の色等）を大型提示装置で示し、児童の理解を支援できた。比較検討の場においては、児童のノートをオクリンクの課題提出機能を活用しながら、効果的に行うことができた。

4. 成果

本年度は、「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラムの中でも『見いだす』に焦点を当て、授業研究に取り組んだ。研究仮説「一人一人の学習状況を適切に把握し、既習事項や課題解決の見通しを確認すれば、自分の考えをもつことができるようになるだろう。」（導入の工夫）に対して、既習事項を掲示するなど教室環境を整えた。また、課題提示・自力解決・比較検討・まとめ・応用問題での習熟という授業スタイルを全校で統一し、学習を通して児童が疑問や課題をもちながら学習することができるようになった。課題提示や比較検討の場においては、ワークシートの工夫に加え、ICT機器を効果的に使いながら、視覚的な支援をすることができた。

◆担当指導主事から（葛南教育事務所 指導主事 鴫田 拓也）

「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラムの『見いだす』に焦点を当て、既習事項の掲示物を活用し、本時の学習につなげることができていた。ICTを活用しながら比較検討の場の工夫をしており、『広げ深める』活動へとつながっていた。ICT機器を活用する際は、児童それぞれの発表を何度でも振り返ることができるような提示の仕方を工夫していく必要がある。算数の「まとめ」とは異なる児童の「振り返り」を算数日記等で行い、実態把握したことが次時の活動へとつながる実践を、来年度も継続していくとよい。